

中学校1年生における道徳授業に関する意識調査

近藤 広理 ・ 植田 和也 ・ 金網 知征
(高度教職実践専攻修士) (香川大学大学院教育学研究科) (香川大学大学院教育学研究科)

760-8522 高松市幸町1-1 香川大学大学院教育学研究科

A Survey of Attitudes towards Moral Education among First year student in Junior High School

Hirotoishi Kondo, Kazuya Ueta and Tomoyuki Kanetsuna

Faculty of Education, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522

要 旨 本研究は、中学校1年生を対象に、道徳授業に関する意識調査を行い、その特徴や授業の課題を分析することを目的としたものである。調査結果を分析する中で、道徳授業に対する捉え方に関わる項目と自己内対話に関わる項目に相関が見られた。また、発言は少ないが、内面では道徳授業に積極的に取り組み、新たな気づきがあると感じる生徒の存在が示唆された。これらの結果から、授業改善の視点や評価の留意点を再認識するに至った。

キーワード 中学校 道徳 意識調査 自己内対話

研究の背景

「特別の教科 道徳」誕生の過程においては、心情理解への偏重や分かりきったことを言わせたり書かせたりすることへの問題提起が、道徳教育の充実に関する懇談会報告(2013)や中央教育審議会答申(2014)等で繰り返し指摘されてきた。その際に、指導方法の改善として、「考える道徳、議論する道徳」が強く求められるとともに、道徳科の目標においては、自己を見つめることが明示された。

この観点に基づく授業実践においては、自己内対話^{*}が重要である。実際、中学校学習指導要領(平成29年告示)解説「特別の教科 道徳編」においても、自己内対話という直接的な表現は見られないが、「自己との対話を深めつつ、自分自身のよさを伸ばしていくようにすることが大切である」や「自己や他者と対話することで、自分自身を振り返り、自らの価値観を見つめ、見直すことになる」といった自己内対話を意識した記述が見られる。

自身の道徳の授業を振り返ってみると、生徒にその時間の学びを終末に書かせてきたが、「本当に深い学

びができたのだろうか」、「自分のこととして考えたり自己を見つめたりできたのだろうか」と実践に疑問を感じるがあった。それは、生徒の記述に自己を見つめた内容があまり見られなかったからである。また、教師がしゃべりすぎたり、分かりきったことを言わせたり、生徒も自分のこととして取り組みず黙ったまま1時間を過ごしたりしているなどの実践に出会うこともある。

上記のような背景には、思春期に突入する中学生が自己を見つめることの難しさ、過度に他人の視線や反応を意識する時期における交流の難しさがあることが推測されるが、実際の生徒の道徳授業に対する受け止めはどのようなものであろうか。

また、道徳が教科化された背景に「いじめ問題」への対応がある。本研究で調査対象とした中学校1年生は、中学校において最もいじめの認知件数が多い学年であり、積極的認知が進む以前は、小学校も含めて最多であった。また、小学校6年生から中学校1年生の間で大きくいじめが増加することで話題になってきた。その背景には、中1ギャップと呼ばれる現象等が

考えられるが、今次の学習指導要領改訂では、道徳教育においても、内容項目等で小中学校の接続がより意識されている。より効果的な道徳授業の実践においては、児童生徒の実態に合わせた丁寧な授業実践を行うことが重要であると考えられる。

先行研究

平成24年度文部科学省道徳教育実施状況調査では、小学校1年生から中学校3年生にかけて学年段階が上がるにつれて道徳の授業が楽しい・ためになると感じる児童・生徒の割合が減少する傾向にあると報告されている。同様に、八千代市教育センター調査研究報告書(2015)においても、学年が上がるにつれて道徳の時間が「好き」、「ためになる」、「大切だ」と思っている児童・生徒数が減少することが報告されている。さらにその中では、道徳の時間に友達の考えを聞いて自分のことを考えたり、新たな道徳的価値の自覚を深めたりする児童・生徒も学年が上がるにつれて減少することが示されている。また、茨木市教育センター研究紀要第201号(2016)では、道徳の時間が好きだという質問項目に肯定的な回答が、小6から中1にかけて大きく減少することが報告されている。

これらの先行研究は、学年進行に伴う意識の変化について検討したものであるが、1つの学年段階に注目し、生徒の道徳の授業に関する意識について詳しく調査した研究はあまり見られない。しかしながら、生徒の道徳の授業に関する意識について詳細に検討することは、これまでの道徳の授業を見直し、生徒が自分のこととして学ぶために重要な視点を与えてくれるはずである。

そこで、本研究では、学年段階の比較ではなく、小学校との接続である中学校1年生の道徳に対する意識に注目し、検討することとした。

これまでも、中1ギャップの解消に向け、道徳授業プログラムを開発する研究が行われてきており、本研究は、それら既存のプログラムの効果を高めるという視点からも価値があると言えよう。

研究の目的

本研究の目的は、中学校1年生を対象とした道徳授業に関する意識調査を通じて、生徒が道徳授業に対してもっている意識の特徴や授業を実際にする際の課題を分析することである。特に、自己内対話との関係を明らかにすることで授業改善に向けた示唆を得ること

を目指した。

調査・分析

(1) 調査方法

調査対象 岡山県内の異なる市町村にある下記3中学校の第1学年(計438名)を対象とした。

A中学校の第1学年201名(女子99名,男子102名)

B中学校の第1学年78名(女子38名,男子40名)

C中学校の第1学年159名(女子79名,男子80名)

調査時期 A中学校には平成30年5月25日(金), B中学校には平成30年9月14日(金), C中学校には平成30年9月13日(木)に実施した。

実施内容 生徒一人ひとりに調査用紙を配付し、担任からの説明の後、道徳の授業に関する10項目(表1)について4件法(よく当てはまる・当てはまる・あまり当てはまらない・全く当てはまらない)で評定を求めた。

表1 道徳授業に関する意識調査項目

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none">①道徳の授業が好きである(楽しみである)②道徳の授業は、ためになると感じる③道徳の授業では新たな気づきがあると感じる④道徳の授業では発言せず黙ったまま1時間が過ぎることがある⑤道徳の授業ではすでに分かっていることを聞かれていると感じる⑥道徳の授業の中で自分の経験を振り返りながら考えている⑦道徳の授業の中で自分がもし主人公ならと想像して考えている⑧道徳の授業では人間としての自己の生き方について考えさせられることがある⑨道徳の授業の前半で、自分自身の考えや感じ方を整理する時間がある⑩道徳の授業の後半で、自分の考えがどう変化したか考える時間がある |
|--|

道徳の授業に関する10項目についてはそれぞれ以下を参考に作成した。

項目①と②は、文部科学省が継続的に調査をしている道徳教育実施状況調査を参考に、道徳の授業に対する受け止めを明らかにする目的で作成した。項目③は、中学校学習指導要領(平成29年告示)第3章「特別の教科 道徳」の指導計画の作成と内容の取扱いにおいて述べられている留意点「新しい見方や考え方を生み出していく」ことの成否を明らかにする目的で作成した。項目④は、授業者のしゃべりすぎという課題

意識から作成した。項目⑤は、中央教育審議会答申「道徳に係る教育課程の改善等について」(2014年10月)で述べられている道徳教育の課題から作成した。項目⑥と⑦は、道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議報告「『特別の教科 道徳』の指導方法・評価等について」(2016)の中で、道徳的諸価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているかの具体の視点として、読み物教材の登場人物を自分に置き換えて考えることや自らの生活や考えを見直すことが挙げられていることを参考に作成した。項目⑧は、中学校学習指導要領(平成29年告示)第3章「特別の教科 道徳」の目標の中にある「人間としての生き方についての考えを深める学習」の実態を調べるために作成した。⑨と⑩は、自己内対話を念頭に作成した。

(2) 分析方法

- 各項目の4件法の結果を百分率で表し分析。
- 肯定的回答を抽出し分析。
- 全項目相互の相関係数を求め、分析。
- 項目②と項目④及び⑤とのクロス集計からそれぞれ4つの群を抽出し、それぞれの群の各項目の平均得点を分析。

(3) 結果と考察

a. 百分率による分析

表1で示した道徳授業の意識調査に関する生徒の反応をまとめたものが図1である。図1によれば、「道徳の授業が好きである(楽しみである)」について、「よく当てはまる」または「当てはまる」と肯定的に

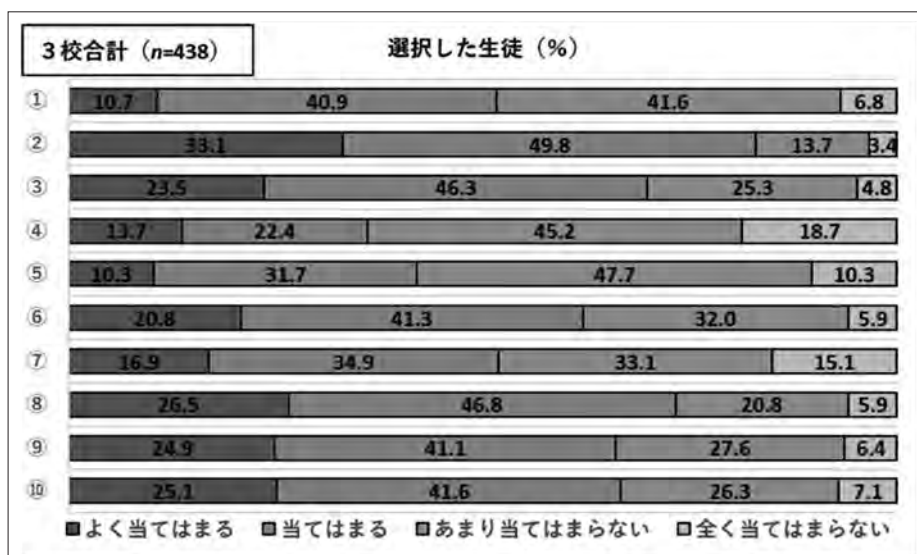


図1 道徳授業に関する意識調査結果

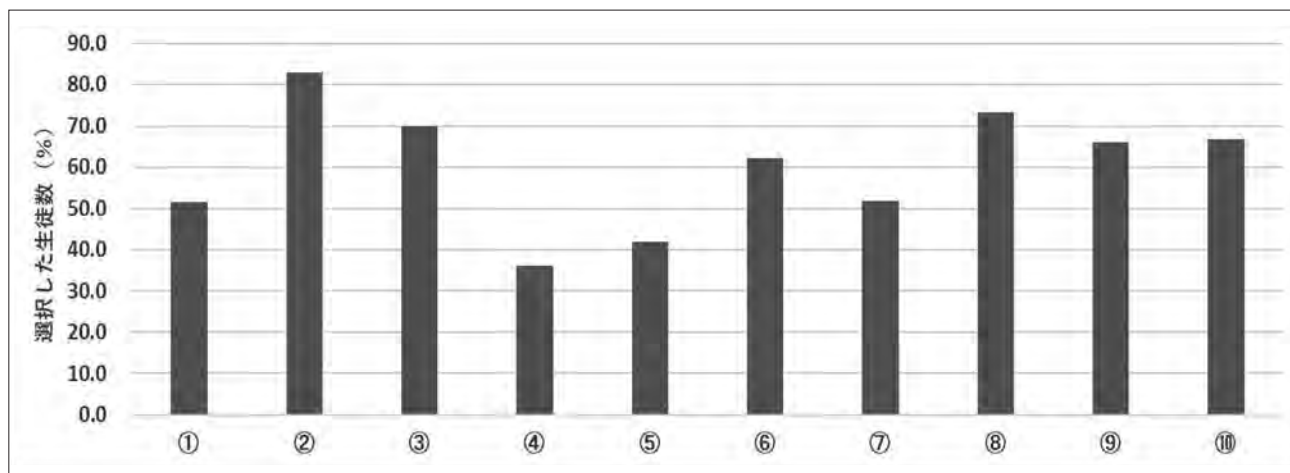


図2 道徳授業に関する意識調査結果の肯定的回答の比較

答えた生徒は、51.6%となった。また、「道徳の授業は、ためになると感じる」について、「よく当てはまる」または「当てはまる」と肯定的に答えた生徒は、82.9%となった。この2項目の肯定的回答を平均すると、67.3%となり、平成24年度文部科学省道徳教育実施状況調査（1年生55.1%）より高い結果となった。

b. 肯定的回答による分析

図1の肯定的回答を抽出したものが図2である。図2によると、②「道徳の授業は、ためになると感じる」、⑧「道徳の授業では人間としての自己の生き方について考えさせられることがある」、③「道徳の授業では新たな気づきがあると感じる」の項目が上位であった。

①「道徳の授業が好きである」と肯定的に回答した生徒は51.6%であるが、②「ためになる」と肯定的に回答した生徒は82.9%、③「新たな気づきがある」と肯定的に回答した生徒は69.8%であり、好きだと肯定的に回答した生徒より多く存在していた。つまり、道徳の授業の意義を感じながらも、好きになれない生徒の存在が示唆された。また、自己内対話に関わる項目⑥～⑧のうち、⑦「道徳の授業の中で自分がもし主人公ならと想像して考えている」が最も低くなっていた。

c. 相関係数による分析

次に、項目間の関係について検証した。項目間の相関係数を求め、まとめたものが表2である。

特に強い相関が見られたものが、⑨「道徳の授業の前半で、自分自身の考えや感じ方を整理する時間がある」と⑩「道徳の授業の後半で、自分の考えがどう変化したか考える時間がある」、②「道徳の授業は、ためになると感じる」と③「道徳の授業では新たな気づきがあると感じる」、②「道徳の授業は、ためになると感じる」と⑧「道徳の授業では人間としての自己の生き方について考えさせられることがある」の項目間であった。

その他、自己内対話に関わる項目⑥～⑧と道徳の授業への肯定的な捉えに関わる項目①及び②との間にも相関が見られた。平成24年度文部科学省道徳教育実施状況調査においては、道徳の授業に対する受け止めとして「道徳の授業を楽しみまたはためになると感じる」という項目があるが、本研究においては、2つに分けて調査しており、道徳の授業に対する肯定的な捉えのうち、②「道徳の授業は、ためになると感じる」の方が、①「好きである」よりもほぼ全ての項目に対して強い相関があるという結果になった。

また、⑧「人間としての自己の生き方について考え

表2 項目相互の相関係数

	①に対する相関係数	②に対する相関係数	③に対する相関係数	④に対する相関係数	⑤に対する相関係数	⑥に対する相関係数	⑦に対する相関係数	⑧に対する相関係数	⑨に対する相関係数	⑩に対する相関係数
①道徳の授業が好きである（楽しみである）										
②道徳の授業は、ためになると感じる	0.47									
③道徳の授業では新たな気づきがあると感じる	0.47	0.61								
④道徳の授業では発言せず黙ったまま1時間が過ぎることがある	-0.14	-0.05	-0.07							
⑤道徳の授業ではすでに分かっていることを聞かれていると感じる	-0.05	-0.12	-0.06	0.08						
⑥道徳の授業の中で自分の経験を振り返りながら考えている	0.32	0.37	0.38	-0.18	0.06					
⑦道徳の授業の中で自分がもし主人公ならと想像して考えている	0.35	0.39	0.39	-0.21	0.06	0.52				
⑧道徳の授業では人間としての自己の生き方について考えさせられることがある	0.33	0.56	0.45	-0.09	0.00	0.45	0.47			
⑨道徳の授業の前半で、自分自身の考えや感じ方を整理する時間がある	0.20	0.35	0.31	-0.09	0.05	0.43	0.37	0.37		
⑩道徳の授業の後半で、自分の考えがどう変化したか考える時間がある	0.19	0.33	0.32	-0.10	-0.01	0.41	0.39	0.41	0.67	

0.0≤|r|≤.2 ほとんど相関なし .2≤|r|≤.4 弱い相関あり .4≤|r|≤.7 比較的強い相関あり .7≤|r|≤1.0 強い相関あり

させられることがある」と回答した生徒ほど、②「道徳の授業はためになる」と感じていることから、道徳科の目標にある「人間としての生き方について考えを深める」が、ある程度達成されていると見ることができた。

次に、表2から、④「道徳の授業では発言せず黙ったまま1時間が過ぎることがある」、⑤「道徳の授業ではすでに分かっていることを聞かれていると感じる」の2項目は、他の項目と相関が認められず、これらが独自の変数であることが示唆された。④、⑤以外の項目はいずれもどこかに相関が見られることから、特徴的な項目として④、⑤に注目した。全国的に課題として挙がることもある④や⑤が、他項目のような道徳授業に関する意識と強い関連を示さないことは予想外であった。

もちろん授業の深まりがなく、黙ったままであったりすでに分かっていることであったりして、授業を肯定的に捉えられない場合もあるであろう。しかし、相関がないということは、黙っていたり、一見すでに分かっていることであったりしても、道徳を自分のこととして捉え肯定的に授業に臨んでいる生徒の存在が予想される。

次に、③「道徳の授業では新たな気づきがあると感じた」と⑧「道徳の授業では人間としての自己の生き方について考えさせられることがある」に注目した。③や⑧には、⑥「道徳の授業の中で自分の経験を振り返りながら考えている」、⑦「道徳の授業の中で自分がもし主人公ならと想像して考えている」、⑨「道徳の授業の前半で、自分自身の考えや感じ方を整理する

時間がある」、⑩「道徳の授業の後半で、自分の考えがどう変化したか考える時間がある」との間に相関が見られた。新たな気づきがあったり、自己の生き方を考えさせられたりするような道徳の授業を展開するためには、経験の想起や、もし主人公ならという想像、授業の前半・後半で自分について考える時間を設けることが重要であることが示唆された。

d. 項目②と項目④及び⑤とのクロス集計に基づく四群による分析

前述の相関分析(表2)から、独自項目であることが示唆された項目④「道徳の授業では発言せず黙ったまま1時間が過ぎることがある」と⑤「道徳の授業ではすでに分かっていることを聞かれていると感じる」についてさらなる検証を進めた。道徳の授業の肯定的な捉えに関わる項目①及び②のうち、表2から研究目的の1つである自己内対話とより強い関連を示した項目②「道徳の授業は、ためになると感じる」を選び、項目④及び⑤とのクロス集計の結果に基づき、対象生徒を4つの群に分類し、その他の項目の平均得点を図3及び図4に示した。なお、平均得点は、「よく当てはまる」を4点の最高得点として算出した。

図3を見ると、②肯定④肯定群と②肯定④否定群の平均得点が類似した傾向を示した一方で、②否定④肯定群及び②否定④否定群の平均得点とは多くの項目で差異が認められた。このことは、発言が少なく表面的な活動からは読み取れないものの、内面では道徳の授業に積極的に取り組み、人間としての自己の生き方について考えさせられたり、新たな気づきがあると感じ

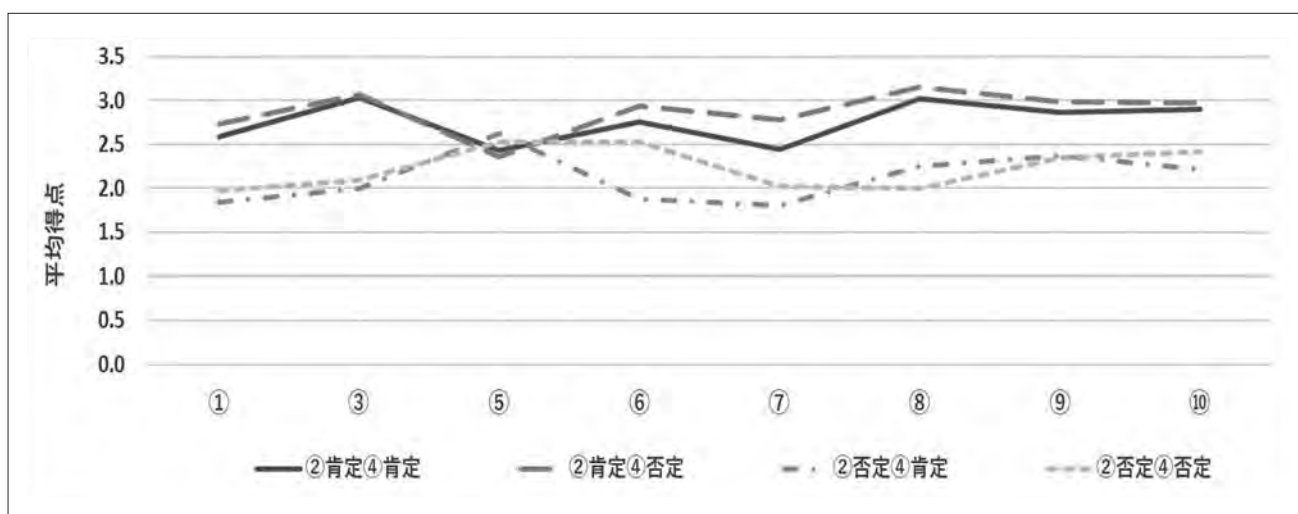


図3 ②・④のクロス集計の四群の各平均得点

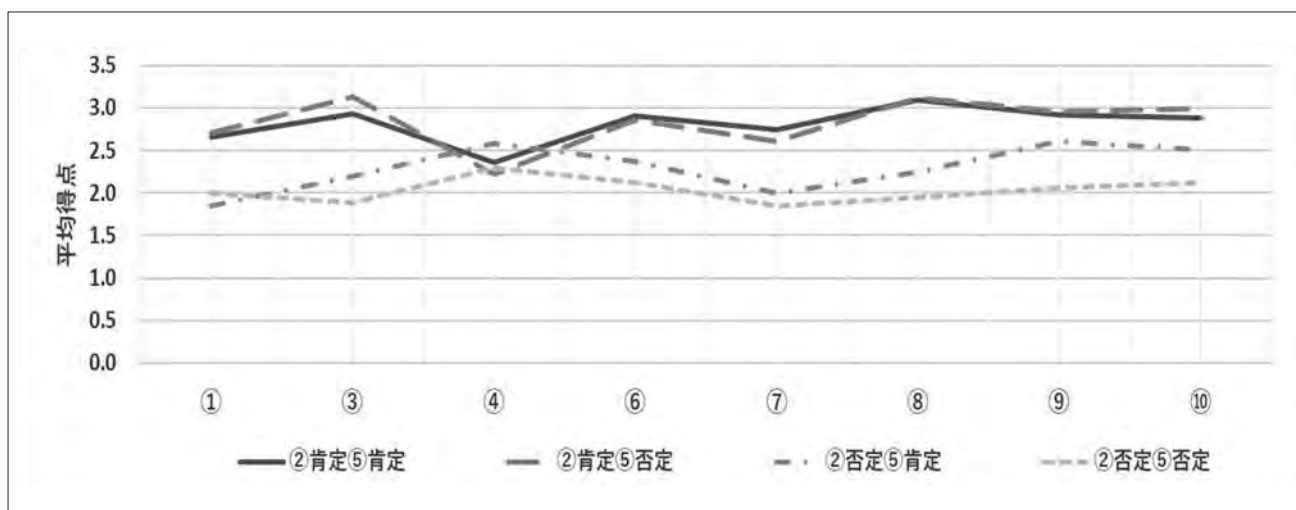


図4 ②・⑤のクロス集計の四群の各平均得点

たりする生徒の存在が示唆された。また、そうした生徒は、自分の経験と結びつけたり、自分が主人公ならと想像したりするなど、自己内対話をしている様子うかがえた。

項目②と⑤の関係においても、図4が示すとおり、②肯定⑤肯定群と②肯定⑤否定群の平均得点が類似する一方で②否定⑤肯定群及び②否定⑤否定群の平均得点とは多くの項目で差異を示すという同様の傾向が認められた。つまり、一見すでに分かっていることであったとしても、そこに新たな気づきがあったり、人間としての自己の生き方について考えさせられたりする生徒の存在が示唆されたのである。また、それらの生徒は、自分の経験と結びつけたり、自分が主人公ならと想像したりするなど、自己内対話をしている様子うかがえた。

小学校に比べより大人に近づく中学校では、すでに分かっていると感ずることも増えてくると予想されるが、そのような中でも、新たな気づきを生むような授業を目指していくことで、道徳の授業が改善できることを示唆するものと考えられよう。

総合考察

本研究では、中学校1年生に対し道徳授業に関する意識調査を行った。その結果を基に、分析を行う中で、主に以下に示す4つの傾向が見いだされた。

第1の傾向は、意識調査の肯定的回答の分布についてである(図2)。その特徴として、道徳の授業が「好き」だと肯定的に回答した生徒以上に、「ためになる」、「新たな気づきがある」と感じる生徒がいるとい

うことがある。また、自己内対話に関わる調査項目のうち、「道徳の授業の中で自分がもし主人公ならと想像して考えている」と回答した生徒が最も少なかったことである。

第2の傾向は、道徳授業に対する捉えと自己内対話の関連についてである。表2から、自己内対話に関わる項目と道徳の授業への肯定的な捉えに関わる項目との間に相関が見られた。また、文部科学省(2012)における道徳の授業に対する受け止めとして「道徳の授業を楽しいまたはためになると感じる」という項目があるが、本研究において「好き/楽しい」と「ためになる」を別個の項目として検証した結果、道徳の授業は、「ためになると感じる」に対してより強い相関が示された。

第3の傾向は、項目「道徳の授業では新たな気づきがある」及び「道徳の授業では人間としての自己の生き方について考えさせられることがある」とその他の項目との相関についてである。この2つの項目には、その他の全ての項目と相関が見られた(表2)。つまり、新たな気づきがあったり自己の生き方を考えさせられたりするような道徳の授業に、経験の想起やもし主人公ならという想像、授業の前半・後半で自分について考える時間を設けることの重要性がうかがえる。

第4の傾向は、他の項目と相関をもたない項目「道徳の授業では発言せず黙ったまま1時間が過ぎることがある」や「道徳の授業ではすでに分かっていることを聞かれていると感じる」についてである。本研究において、すでに分かっていることだがためになると感じている群と、すでに分かっていることではなくため

になると感じている群の平均得点が類似することが明らかとなった。このことは、一見すでに分かっていることであったとしても、そこに新たな気づきがあったり、人間としての自己の生き方について考えさせられたりすると感じている生徒の存在を示唆するものである。小学校に比べより大人に近づく中学校では、すでに分かっていると感じる生徒が増えることを前提に、新たな気づきを生むような授業を目指していくことで、道徳の授業が改善できることを示唆するものではないだろうか。

同様に、発言せずためになると感じる群と、発言しためになると感じる群の平均得点も類似した。これも、発言が少なく表面的な活動からは読み取れないものの、その内面では道徳の授業に積極的に取り組み、人間としての自己の生き方について考えたり、新たな気づきがあると感じたりする生徒の存在を示唆するものである。

中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別の教科 道徳編「第5章 道徳科の評価」の中に、「発言が多くない生徒や考えたことを文章に記述することが苦手な生徒が、教師や他の生徒の発言に聞き入ったり、考えを深めようとしていたりしている姿に着目するなど、発言や記述ではない形で表出する生徒の姿に着目するということが重要である。」と述べられている。今回の結果は、この記述の重要性を、生徒の実態から再認識させるデータであると言える。

今回、生徒の道徳授業に関する意識の実態調査を行う中で、一見すでに分かっていることであっても、あるいは、発言が少なくても、少なくとも内面では道徳の授業に積極的に取り組み、新たな気づきがあると感じる生徒の存在が示唆された。それらの生徒に共通することは、授業の中で自己内対話を行っていることであつた。また自己内対話は、道徳授業の捉えや自己の生き方を考えさせられることとも関連しており、まさに中学校の道徳授業の改善における自己内対話の重要性を示したといえよう。

参考文献

- 1) 道徳教育の充実に関する懇談会（2013）「今後の道徳教育の改善・充実方策について～新しい時代を人としてより良く生きる力を育てるために～（報告）」
- 2) 文部科学省 中学校学習指導要領（平成29年3月告示）
- 3) 文部科学省 中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別の教科 道徳編 p.113

- 4) 文部科学省（2012）道徳教育実施状況調査（平成24年度調査）
- 5) 八千代市教育センター（2015）「道徳教育に関する意識と実態」調査研究報告書 第41集
- 6) 茨木市教育センター（2016）「今求められる道徳授業のあり方について～児童生徒アンケートから～」茨木市教育センター研究紀要 第201号
- 7) 文部科学省（2019）第124回初中分科会資料2「平成30年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要」
- 8) 土田雄一・川添幹貴・尾高雅浩（2015）「小中連続道徳授業の省察～市原市A中学校区での実践分析から～」千葉大学教育学部研究紀要第63巻 pp.213-224.
- 9) 森川敦子・鈴木由美子・高橋均（2016）「対人的適応感を向上させる中1ギャップ解消のための道徳教育プログラム—教材の組み合わせ方を変えた2つの道徳教育プログラムの比較を通して—」日本道徳教育学会「道徳と教育」0巻334号 pp.41-51.
- 10) 中央教育審議会（2014）「道徳に係る教育課程の改善等について（答申）」
- 11) 道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議（2016）「特別の教科 道徳」の指導方法・評価等について（報告）」

＜道徳の授業に関する意識調査＞

クラス _____ 年 _____ 組 _____ 性別 (_____)

本調査は、道徳の授業に対するみなさんの素直な意識を調査し、その結果をもとにみなさんの道徳教育がよりよいものになるように改善するために行うものです。一人ひとりをお評価するために行うものではありません。

これまでの道徳の授業を思い出し次の1～4の中から自分に近いものを選び、□の中に番号を記入してください。

1 よく当てはまる 2 当てはまる 3 あまり当てはまらない 4 全く当てはまらない

道徳の授業が好きである（楽しみである）	→	
道徳の授業は、ためになると感じる	→	
道徳の授業では新たな気づきがあると感じる	→	
道徳の授業では発言せず黙ったまま1時間が過ぎることがある	→	
道徳の授業ではすでに分かっていることを聞かれていると感じる	→	
道徳の授業の中で自分の経験を振り返りながら考えている	→	
道徳の授業の中で自分がもし主人公ならと想像して考えている	→	
道徳の授業では人間としての自己の生き方について考えさせられることがある	→	
道徳の授業の前半で、自分自身の考えや感じ方を整理する時間がある	→	
道徳の授業の後半で、自分の考えがどう変化したか考える時間がある	→	

道徳の授業に関する意識調査は以上です。
協力していただきありがとうございました。